

# 国際結婚における同類婚パターンに対する出入国管理政策の影響 人口動態調査の分析から

永吉希久子(東京大学)・打越文弥(プリンストン大学)

## 背景と目的

- 国際結婚の二つの意味
  - 統合の表れ／滞在の安定化の手段  
→ 同類婚／国籍と他の資源の交換
- アジア女性は自分より高齢・低学歴の日本人男性と結婚
  - 日本人男性の国籍とアジア人女性の若さ／学歴の交換
- 2005年以降の出入国管理制度の変化の影響可能性
  - 興業の厳格化→結婚可能な女性のプールを減らす
  - 低技能労働者受け入れ窓口の拡大→結婚以外の安定的な滞在手段の出現→日本人の国籍の交換価値の低下

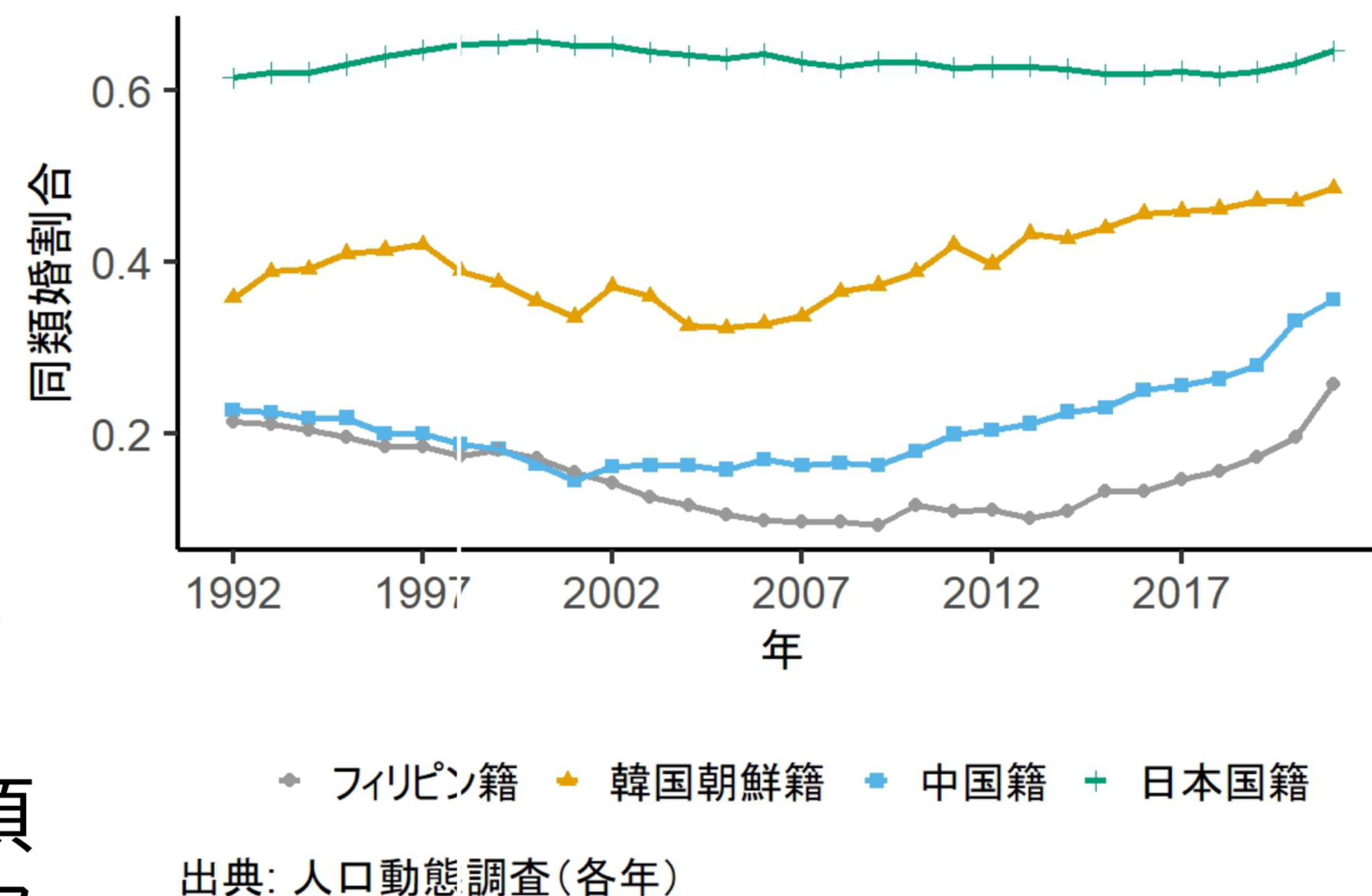
RQ: 出入国管理政策の変化は、国際結婚の意味を変えたのか？変えたならば、それはどのような経路でか？

## 方法

- 使用データ
  - 人口動態調査(婚姻票)1992-2022(個票)
  - 国勢調査1995-2020(公表集計値)
  - 夫日本国籍と妻日本国籍、韓国・朝鮮籍、中国籍、フィリピン籍の夫婦に限定
  - 交換指数の分析では
    - 日本国籍者同士の結婚は1%リサンプリング
    - 結婚時年齢を79歳以下に限定
- 分析方法
  - 交換指数(exchange index, EI) (Xie and Dong 2021)
    - 国勢調査から無配偶者の年齢(5歳刻み)のパーセンタイル・ランクを計算(若いほど魅力が高い)
    - 人口動態調査の夫・妻にランクを割り当て
    - 日本国籍女性／対象国籍女性の年齢分布をそろえる
    - 夫のランク・年齢・世帯の職業、夫／妻の婚姻経験、居住都道府県、都市度をもとにマッチング
    - マッチングウェイトで重みづけしたうえで、国際結婚が妻のランクに与える効果(交換指数)を算出

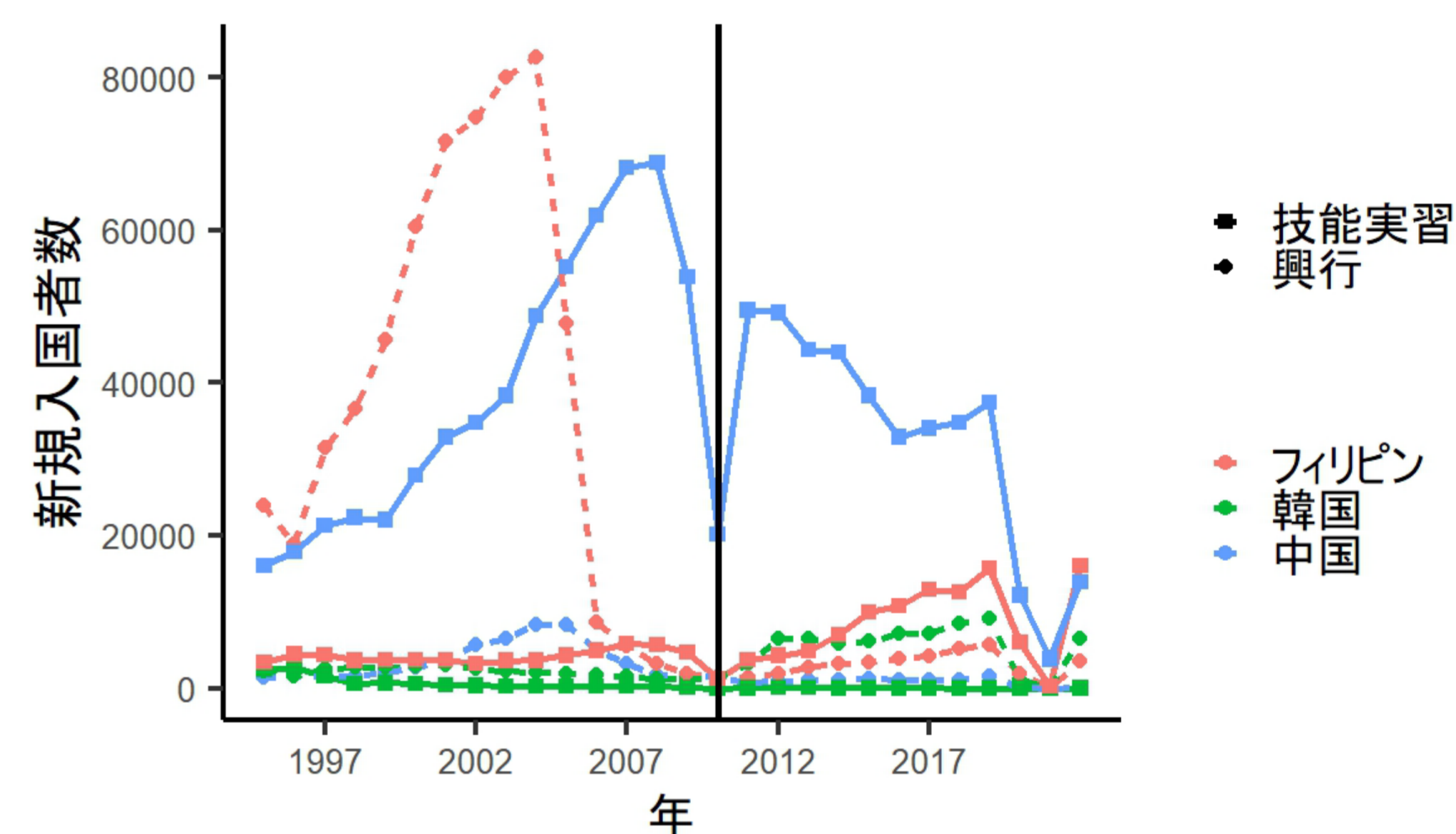
## 結果1: 年齢同類婚(3歳差以内)割合の推移

- 妻国籍による差
  - 国際結婚は同類婚割合が低い
  - 特にフィリピン籍、中国籍
- 国籍による推移の差
  - 国際結婚の同類婚割合は逆U字
  - 日本国籍 < 韓国・朝鮮籍 < 中国籍 < フィリピン籍の順でUが深い
  - 韓国・朝鮮籍、中国籍は2000年頃フィリピン籍は2010年頃がピーク



出典: 人口動態調査(各年)

図1 年齢同類婚割合の変化

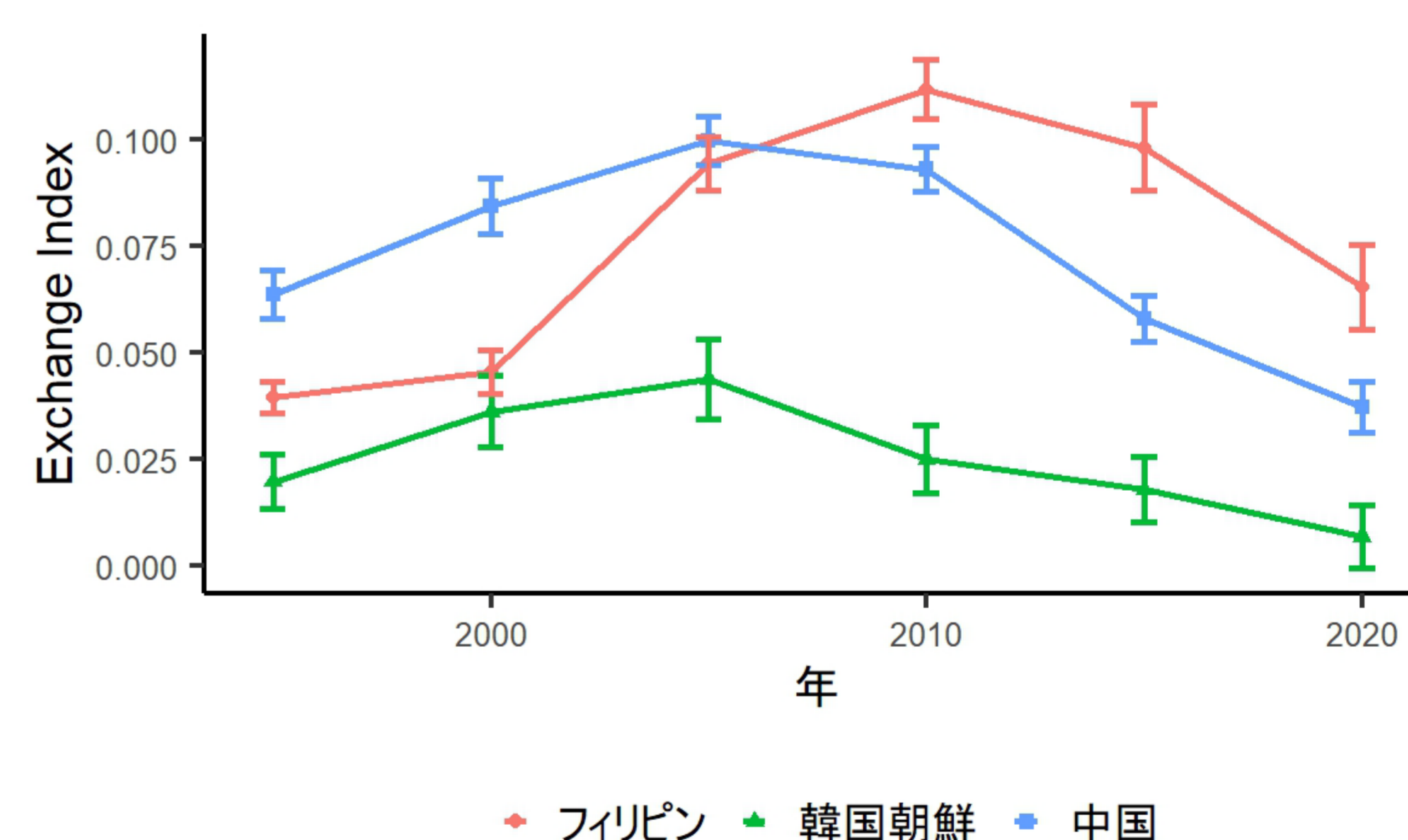


出典: 出入国管理統計を基に作成  
(技能実習の数は2009年までは研修の値)

図2 国籍／在留資格別新規入国者数の変化

## 結果2: 交換指数の推移

- 女性の年齢分布の違いを統制しても、国勢結婚はより若い妻を得る傾向
- アジア女性との結婚における日本国籍の交換価値
- 交換指数の変化
  - 韓国・朝鮮籍、中国籍では2005年、フィリピン籍では2010年まで上昇、その後緩やかに低下
  - 国籍間の交換指数の差は拡大
    - 韓国・朝鮮籍では2015年から統計的に有意でない
    - フィリピン籍では2000年から2005年に交換指数が高まりその後低下するが、2020年でも1995年よりも指数が大きい



出典: 人口動態調査と国勢調査をもとに算出

図3 交換指数の推移

## 考察

- アジア女性との国際結婚における年齢同類婚割合の低さ
  - 男性の日本国籍を資源とした女性の若さとの交換  
→ 人口分布に還元されない日本国籍の価値が同類婚の低さにつながる
- 日本国籍の交換価値の変化
  - 2005年までの上昇とその後の低下
  - フィリピン籍者では2010年がピーク  
→ 中国籍者では2010年ごろから技能実習での新規入国者数も減少  
フィリピン籍者では同時期から技能実習での新規入国者増加

## まとめ

- 年齢同類婚の変化は、アジア女性にとっての日本国籍の交換価値の変化を反映
- 労働者としての移住女性の受け入れは、国際結婚における国籍の交換価値を低下させる
- 部分的には日本の相対的な経済力の変化を反映？